

群大重粒子倶楽部

群馬大学 重粒子線医学センター

〒371-8511 群馬県前橋市昭和町三丁目39-22 TEL.027-220-7111 (代表)

治療患者実績の動向について

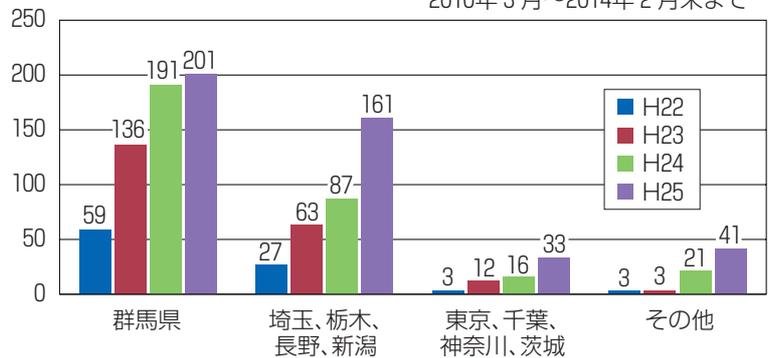
群馬大学重粒子線医学センター 教授 大野 達也

群馬大学の重粒子線治療患者数は、平成26年2月までにのべ1062名となりました。治療人数が1000名を超えたのは、先行施設の放射線医学総合研究所(放医研)では8年目のことでした。群馬大学は放医研で確立された治療技術を導入して取り組んできたとはいえ、半分の4年間で達成したことは国内外の施設と比べても順調な稼働状況を表しています。本号では、最近の患者動向について紹介したいと思います。

群馬大学では、装置の薬事承認と稼働可能時間、スタッフ数などにに基づき治療人数の目標値を設定してきました。これまでの患者数の推移をみると、平成21年度5名(3月のみ)、平成22年度87名(目標50名)、平成23年度214名(目標150名)、平成24年度306名(目標300名)、平成25年度480-500名程の見込み(目標450名)と目標を超える治療件数となっています。この間にスタッフ数は約2倍に増え、プロトコル数も20に達して適応疾患が拡大されました。スタッフの育成、新規プロトコルへの対応などと共に、診療体制にも改善が重ねられ、重粒子線医学センターは常に成長を続けています。

地域別の治療患者数の推移

2010年3月～2014年2月末まで

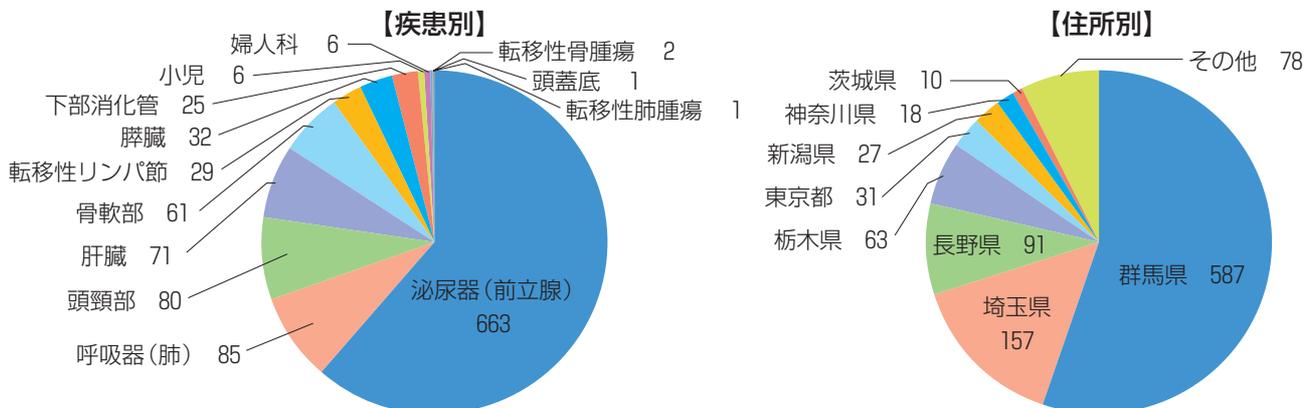


居住地域別の患者では、平成24年度までは60%以上を占めていた群馬県内患者の割合は平成25年度には45%にまで低下しています。代わって、埼玉県、長野県、栃木県、東京都、新潟県といった地域からの紹介が2倍近くに増えており、群馬県とこれらの地域を合わせると全体の約9割に達します。今は西日本の一部を除き全国からの紹介があり、昨年からは国外患者の治療も開始しました。

最近の疾患別の傾向としては、前立腺がんの占める割合が80%から約50%にまで低下し、代わって肺がん、骨軟部腫瘍、頭頸部がん、肝臓がんなどの割合が増えています。また、昨年夏に治療開始した膵臓がんも既に30名以上が治療を受けています。

新年度の目標は600名です。スタッフの増員に加えて、外来の増築、第2シミュレーション室の稼働など新たな体制を準備してきました。患者数が増加しても診療の質が低下しないように、そして医療安全の点にも配慮しながら、これまで通り、一人一人の患者さんに最善の治療を提供していきたいと思ひます。

重粒子線治療患者数



※数字はのべ治療人数(2014年2月末まで)

2014年1月は群馬大学が主催する学会が数多く開催されました。

1月17日には第4回国際放射線神経外科学会が、1月18日には第5回日本放射線外科学会が、どちらも高崎シティギャラリーで開催されました。

国際神経放射線外科学会では、重粒子線やX線の放射線神経生物学に関する研究や臨床について報告、議論がなされました。翌18日に開催された放射線外科学会では、重粒子線やX線を用いた寡分割照射における臨床医学、放射線物理学を中心とした報告がなされ、私自身も1期肺癌に対する重粒子線治療経験について発表して参りました。これらの学会には放射線治療従事者のみでなく、他科の医師も多く参加され、活発な議論がなされました。重粒子線治療に対する期待がさらに高まってきていることを強く実感しました。

1月24日には群馬大学博士課程重粒子線医学グローバルリーダー養成プログラムの主催で、公開国際シンポジウムが前橋テルサで開催されました。私は本プログラムに所属する大学院生でもありますが、シンポジウムでは座長を務めさせていただき、大変貴重な経験をいたしました。世界の第一線で活躍されている先生を講師として海外から多数お招きし、粒子線治療に関する臨床、生物、物理、現状から展望まで多岐に渡る内容で講演、議論があり、非常に有意義な時間を過ごすことができました。また、本シンポジウムに先立って、前日の23日には学生研究教育セミナーが伊香保研修所で行われ、講師の先生方から、自身の研究について直接ご指導を賜る機会がありました。私達大学院生にとっては非常に刺激的な経験でした。

こうした学会活動を経て、重粒子線治療に携わることができる喜びを感じるとともに、責任や期待を背負っていると感じ、身が引き締まる思いです。今後もさらなる重粒子線治療の発展に寄与できるよう、日々臨床に研究に精進して参ります。



重粒子線外来改修工事完了のお知らせ

重粒子線医学センター 看護師 谷山 奈保子



今年の1月より重粒子線外来の拡張工事が行われました。週末・夜間での工事、診療を行いながらの作業でしたが、(財)同愛会のご支援、スタッフ及び工事関係者皆様のご協力のお陰で無事に工事を終えることができました。

昨年は患者数の増加に伴い、待合や中廊下(超混雑時は外廊下まで)に患者さんが溢れかえってしまう状況でした。診察室も不足しており、処置室や隣のカンファレンス室で診察をすることもありました。今回の工事で、診察室が1部屋、面談室が2部屋増え、待合スペースも広がりました。患者さんからの評判も上々です。スタッフ室や倉庫・器材室も新設され、受付スペースが広がったこともあり、スタッフの働きやすい職場作りにも繋がりました。

今後も患者さんが待ち時間をできるだけゆったり気持ち良く過ごせるような空間作りができればと思います。

大雪回想録 from 重粒子線医学センター

附属病院放射線部 第一重粒子線治療主任 石居 隆義

関東地方は2月1、2週目の週末は大雪に見舞われました。

特に2月15日(金)から翌日にかけては、前橋市では最大73cmという、過去の記録を大幅に更新する降雪となりました。ここでは当時の重粒子線医学センターの様子をふりかえってみようと思います。

まず金曜日の夕方、治療終了後の深夜から土曜日の朝にかけて、送電線着雪による短時間の停電が繰り返し発生して、運転員、物理スタッフが対応に追われました。装置への直接の被害は有りませんでした。予定されていた土曜日の実験利用は中止となりました。

次に週が明けて月曜日朝、重粒子線施設周辺の道路の除雪が始まりました。雪のため出勤が遅れたスタッフもいましたが、技師、物理士、技術員に医師も加わり、スタッフ総出で患者搬送用車両の車庫までの通路の確保に尽力しました。除雪道具が不足したため、プラスチックのチリ



これぞ多職種連携の雪かき作業



除雪車も来てくれてようやく地面が見えました

トリやゴミ箱までも活躍する始末でした。

それでも昼ごろには通路を確保して、患者さんの治療準備業務と加速器運用を開始しました。外部の業者に委託している治療用のボラスの納品の遅れも心配されましたが、小型トラックによる運送と、不足分については内部作製を行って、無事に治療に間に合わせることができました。

その他、一部患者さんの治療準備において予定変更もありましたが、概ね業務をこなすことができました。

火曜日からの治療は、交通状況もまだ完全に復旧せず、限られた駐車場所での運用となり、踏み固められた雪や、解けた雪の凍結により足元も悪く、外来患者様にもご迷惑をおかけしてしまいましたが、予定数の治療を行うことができました。

2週間経過して月末になってもなお施設周辺の路肩に雪が残っている状況ですが、施設自体は平常運用となっています。

今回の事態においては、群馬大学各部署職員、スタッフはもとより、関係者の皆様のご協力に大変感謝する次第です。



最大積雪73cm時の施設外観



普段はこうです